

# 文化の継承

## その九 米づくり・農業



秋には黄金色の穂波が庄内平野一面に広がる

湿田から乾田馬耕法、そして機械化へ

深澤 ここ藤島は、明治以降、東田川郡役所をはじめ、藤島税務署、藤島警察署など行政の中心的な施設が設置され、それに伴い庄内農学校（現・県立庄内農業高校）、県立農事試験場、内分場（現・県農業生産技術試験場庄内支場）等も開設され、庄内の米づくり・農業の中心的な地域であつたと思います。

では「なぜ藤島は稻作なのか？」を解きますと、農業の歴史でも一大改革だった「乾田馬耕法」をいち早く積極的にやつたことがすぐ大きかつた。明治二十四年、田川郡会の決議に

よつて乾田馬耕法を普及しようとして、福岡県から島野嘉作氏を講師に迎えました。その方は大変熱意を持っており、「乾田馬耕法」が地元の人々に受け入れられ、結果が出るには十年はかかるだろつ。私はこれが普及するまで郷里に帰らない」という固い決意でここに来られたそうです。この改革が藤島の米づくりに大きな影響を与えたと聞いています。鈴木さんは馬耕による農業も経験されたと思いますが、当時の状況はどうでした？

鈴木 私は学校を卒業すると農業をやりまして、当時は馬耕、馬を使いました。冬の間、畜舎に閉じ込められていた馬を春の光と共に外に出すと、もうハツ

日本の中でも名高い庄内平野。言つまでもなくここ鶴岡は、米づくり・農業を基幹産業としています。今月は、県農業生産技術試験場庄内支場や県立庄内農業高校など農業関連施設、専門校が開設されている藤島地域を対象に、庄内の米づくりのために果してきた貴重な努力の足跡を辿つて見ることにします。これまで、多くの人々が、様々な農業環境や技術を向上させながら「良い米を作る」という情熱を持って取り組んできて、今があると思うのです。

そこで今回は、庄内、藤島地域の米づくり・農業に詳しい、鈴木重雄さん、上林幹夫さん、佐々木茂吉さん、渡部幸一郎さん、富樫達喜さんにお集まりいただき、藤島地域エコタウン推進員の深澤昭吾さんの司会で藤島地域の米づくり・農業を中心に語つていただきました。

鈴木重雄 氏

元農協職員  
元八丈島公民館館長



上林幹夫 氏

元文化財調査委員長  
伝統芸能保存会会員



佐々木茂吉 氏

元県立庄内農業高校教諭  
農業関係誌編集長



深澤昭吾 氏 (司会)  
市藤島地域エコタウン推進員



渡部幸一郎 氏

県農業総合研究センター農業  
生産技術試験場庄内支場長



富樫達喜 氏

因幡堰土地改良区理事長



富樫 ちょうど近代的農業への足がかりという時代でした。三十年代に普及した耕耘機から、トラクターに変わる時代だった

富樫 ちよほど近代的農業への足がかりという時代でした。三十年代に普及した耕耘機から、トラクターに変わる時代だった

ラツとして、その馬の勢いを抑えながら馬耕の鍬おろしをするんです。鍬おろしは二人でやりが後ろについて、二人がかりで馬を訓練するわけです。だいたい二歩程が一日のノルマでした。それから馬耕が終わると碎土をやり、土を返す、一番返し、一番返しを進め、そして代搔きまでします。この作業を春先の節句のころから四月の末ころまでに終わらせるのですが、大変な忙しい作業でした。

深澤 上林さんは、馬耕から耕耘機への移行時期のあたりを経験されましたか?

上林 私は昭和三十一年に庄内農業高校を卒業し、農業を始めました。まだ当時は馬耕が主力だったと思います。だんだん耕耘機入り、今のようなロータリーワークの耕耘機ではなく、クランク式やスクリュー式など機械に携わった最初の時代でした。

深澤 富樫さんが農業を始めたころは馬耕というより、耕耘機やトラクターをもう使っていましたが?

深澤 今、馬耕から機械化へという話をお伺いしましたが、米づくりは田を耕すことともう一つ、いかに田んぼに潤沢に水を引き入れるか、これが重要なと思います。水について富樫さんにお聞きしようと思います。

富樫 現在の赤川を水源とする庄内の農業用水路の系統は、今から約四百年以上前にほぼ完成されたと言われています。この幹線堰が完成すると、そこからいわゆる支堰が網の目のようにいろんな所に引かれ、それぞれに新田が開発されていったんです。今我々が見る南庄内の田園風景は、江戸時代の堰の開削が土台になっていると思います。

さて、この藤島地域を潤してきた因幡堰に目を向けて、今から約四百年前の一六〇一年に山形城主・最上義光が、家臣の新関因幡守を藤島城主に配置しました。当時の藤島は、度重なる戦と百姓一揆などで形をとどめないほど荒廃していました。このような時期に新関因幡守は、地元の長年の願いだった赤川から藤島領内に水を引く用水溝の開削工事、後の因幡堰の工事

## 苦労の末、 完成した因幡堰

見てきたと言えると思います。



豊栄にある水にまつわる石碑



5月、庄内平野でいっせいに田植えが始まる



座談会の様子

に着手しました。その後、最上氏の改易によりて新関因幡守は庄内の地を去り、開削工事は中止を余儀なくされたわけです。しかし農民は工事の続行を願う運動を絶え間なく続け、一六八九年に工事再開、一応の形は整つたのですが、急速な新田開発にはこたえられるものではあります。当時の藩主・酒井忠真は農民の苦しみを目の当たりにし、因幡堰の大改修を英断したようです。莫大な経費と数万に及ぶ人足によって、困難を極めた難工事も一七〇六年ついに完成しております。また、その後の改修工事の責任者であつた大堰守の田沢勘七さんが「人柱となつて永くこの樋を守る」と遺言し水路橋の根元に自刃をはかつたという逸話もあります。

鈴木 水で難儀した所は、水神が強かつたと思う。豊栄には大きい碑があるよ。そこは難儀したんだと思います。

深澤 ところで、藤島が米の集積地、流通拠点として栄えた象徴として藤島倉庫がありますね。鈴木 著・藩政時代は川舟で米を運んだけど、鉄道の時代になると、各地で競つて鉄道の沿線に米の倉庫を建てたと。藤島駅近くにある藤島倉庫は今も活躍しています。この藤島倉庫は十棟あり、酒田の山居倉庫の支庫として建てられました。米の収容・建物の床面積にすると酒田の山居倉庫の約二倍。あの倉庫群も藤島の特徴だと思うんです。当時、この藤島倉庫の米は山居倉庫の米と同じく市場性が高く、農家から集めた米をバラにして、もう一回袋に詰め直す。そうやって藤島倉庫の米は品質が一定で信頼できるんだよと全国に売り出しました。こここの米俵には、黒縄をかけたことから「黒縄の米」という名で全国に流通したわけです。

## 農家の願いだつた 庄内分場の開設

深澤 また、大正九年に今の県農業生産技術試験場庄内支場が藤島に開設されたことも、地域の農業に大きな恩恵を与えたと

## 米の集積地として 活躍した藤島倉庫

思います。渡部さん、当時、藤島に農事試験場が設置された経緯などをお話ください。

渡部 庄内支場は、山形県立農事試験場庄内分場として設立されています。当時は山形市の本場一か所だけで、内陸とは気象や土壤、栽培方法も違う状況の中、庄内の農家の「ぜひ試験場を設立してほしい」という気運が高かつたと聞いています。また経費の大部分は、国の補助金と東田川郡の農家の寄付でまかなつたようで、やはりこの地には農業に対する熱烈な意欲や要望があつたと考えています。

当時、庄内の地域に合った栽培方法の試験を目的に水稻の採種圃を設けて始めました。昭和二年から二十年まで、いもち病防除の指定試験が続きます。これはこの地域が土壤的に飽和比べ粘土含量が少なく秋落ちやすく、いもち病が出やすかつたことから研究したようです。また、昭和二十二年から三十六年までは、ごまはがれ病の防除指定試験をしています。ごまはがれ病もこの地域で発生が多く非常に問題となっていました。

深澤 そういう点では、ここは必ずしも土壤条件では肥沃な土壤ではなかつた。よつて国の指定試験地になつたり、県の研究

をいち早くここで取り入れたりできた、これがこの地域にすごく良かったのだと思います。

は国の農事試験場畿内支場に勤められ、明治三十七年に日本で初めて人工交配による品種改良を始められました。

## 恵まれた人を育てる環境

### 米づくりにかけた篠農家たち

鈴木 篠農家と言われる人たちには、表には出なくともそれぞれ



現在、庄内支場で試験中の「山形97号」の生育調査の様子



今も米の集積地として活躍する藤島倉庫群



庄内支場には県内各地から農業関係者が視察に訪れる

渡部 また、品種改良、民間育種が、庄内は非常に盛んな地域であり、明治から昭和の初期にかけて篠農家と言われる皆さん六十人を超えるいろんな品種を作っています。全部で百六十種を超えてます。その中で最も有名なのは阿部亀治さんが作った「亀ノ尾」。これは明治二十六年に選抜を開始しました。コシヒカリやササニシキなどの先祖になっていて、おいしい米はここからきているのだと思います。佐藤弥太右衛門さん

という方、この方が作った中で特に有名なのが「イ号」です。明治三十五年に「愛國」の自然雑種から選抜したようです。当時いち病に強いということでもかなり病に強いということでもかなり普及しています。また、鶴岡出身の方もたくさんいらっしゃいます。工藤吉郎兵衛さんという方は、大正四年に交配して「福坊主」という品種を作りました。これも非常に安定した生育で多収であったようです。あと、農家の方ではないのですが、加藤茂苟さん。この方

渡部 年から品種改良に取り組んでいます。やはり倒れやすい品種は栽培しづらいので、なるべく倒れず、もちろん食味が良い品種を目標としています。ここで生まれた「はえぬき」は、県内の栽培面積の六割を超えて作られています。また、新品種候補の「山形九七号」。これを今、奨励品種にするため栽培マニュアルを試験しており、平成二十二年から実際に農家の方に作ってもらいう予定です。この品種も食べて非常においしい米です。ご飯にすると白さが際立ち甘みがあり、一粒一粒がしつかりしてて粘りがあります。しかも倒れにくい特徴がありますので「食べておいしく農家の方が作りやすいものを」という伝統の中

佐々木 今お話をされたように、この地域には人の利があつたと思います。農家の方が品種改良をするという意欲や取り組みが庄内では他地域に比べて旺盛であつた。そういう人材を育成するのが庄農だったわけです。

八年に現在の校歌ができました。私も大変すばらしい校歌だと思っています。校歌の一番に、「民の糧」という一節があります。これは農業が揺らぐ時は国が揺らぐ時だ。農業は国の中でも、その精神と農業者としてのプライドを失うことなく庄内一円の糧を支えてきたことが校歌の一番に込められています。それから一番にある「浩然の氣」。浩然の氣とは自然の中でのびの

で生まれたのだと思います。





中学生の田植え体験の様子

の守り神となり、悪疫退散、五穀豊穣に力を尽くすとされました。また、集落を一つにまとめた場合には、こういう行事が一番効果があり、若い人をまとめる力があったので、村々に広がつていったのだと思います。

**鈴木** 若い人には「五人のうちの一番獅子になりたい」という競争心があったの。それは集落にとって非常にいいことだし、獅子踊りは秋作業に備えて体を鍛える場でもあったと思つる。

**富樫** 獅子踊りも藁文化もなぜ藤島でこれだけ栄えたかというのではなく、やつぱりここは全国的にみて豊かな農村だったんだよな。その豊かさから獅子踊りも継承する余力があったんだろつと。

**鈴木** 農業つてのは集落単位、共同でないとできないことがいっぱいあるんだやの。こういう文化も現在、藁工芸部会や各地域の獅子、神楽の保存会が頑張つて継承しています。

## これからも、ここで 米づくり・農業を

**深澤** 庄内、藤島にとって、米づくり・農業は多くのものをもたらし、たくさんの方の努力や情熱のもとに発展してきており、時代が変わつても頑張つて取り組んでいきたいですね。

**鈴木** 農業の歴史をみると、昔から厳しさの繰り返しの面もありますが、いい時と悪い時があります。今は厳しい時代と言われていますが、諦めないで希望を持つて、ここで農業を続けてもらいたいというのが私の願いです。

**佐々木** 不易流行という言葉がありますよね。時代の変化に応することは極めて大事なわけです。農業も時代の変化とともに変貌をとげてきました。しかし、農業の根本は変わらないと思いります。農業をやる上で、人づくりと土づくり、この両輪が大切です。人づくりについて教育的な観点から言えば、農業をどうしてます頭に知識を身に付けて考える。次に、手に技術を身に付ける。そして、実践をする心を磨くことですね。また土づくりについては、いつの時代も土が作物を作る基本だと思います。将来的には、例えば今、水田の有効利用と言われるバイオマスを活用した藁によるエタノールの製造等、将来をきちんと見据えて多様なニーズに応えられるように、これからもこの地域が

ます。この澄んだ空気と水、そして米どころとして豊かな環境をこれからも存続していく、そういう気持ちを持てるように、将来にわたつて子供たちにつなげていけるようにみんなで努力をしていきたいと思います。

**上林** 庄内の田園風景は美田と言われます。この澄んだ空気と水、そして米どころとして豊かな環境をこれからも存続していくように、将来にわたつて子供たちにつなげていけるようにみんなで努力をしていきたいと思います。

**深澤** これからも、この地域が庄内の農業の中心的役割を担っていく、そういう気持ちを持ちながら進んでいきたいですね。本日はありがとうございました。

**渡部** 歴史的にもこの地域は、乾田馬耕法をいち早く取り入れたり、新しい品種を民間育種し